社会福祉援助技術演習授業研究
「施設介護サービス計画（ケアプラン）作成」

The Study of Social Work Practice in College Class for Making Care Plan

根本　曜子　古川　繁子

要旨：社会福祉援助技術における「ケアプラン」作成の授業について、その展開と結果についてまとめた。来年度から始まる新カリキュラムで時間数が多く、必修科目となる「介護過程」へ応用していく基礎資料としていくため、授業の展開と学生の感想を分析し、考察した。今回はグループワーク、インシデントプロセス方式による事例紹介を用いて授業を展開した。効果の表れが実施時期によるものであり、グループ内でロールプレイが見られた。その結果、学生が授業に積極的に取り組み、多様なケアプランを作成することが出来た。このことから扱う事例、時期、授業方法が重要であるといえる。一年半、150 時間にわたる「介護過程Ⅰ～Ⅳ」においてどう内容を配置するかが今後の課題である。なお、学生の授業への関わりについて談話分析を行った。

Key Words：動機付け　インシデントプロセス方式　ロールプレイ　感情移入　談話

１．　はじめに

平成 12 年 4 月に介護保険制度開始と介護サービスの質を高めるために介護福祉士養成カリキュラムが改正された。1500 時間から 1650 時間に増え、介護保険法の居宅介護支援及び施設介護サービス計画について追加されることになり、社会福祉援助技術演習の授業で介護サービス計画（以下ケアプランと称す）を学生に学ばせることとした。古川が在宅のケアプランを担当し、根本が施設のケアプラン作成の授業を担当することとした。本論(研究ノート)は施設ケアプラン授業を振り返り、評価を行った報告である。

平成 20 年度のカリキュラム改正で現行 1650 時間が平成 21 年度から更に 1800 時間となる。新カリキュラムでは「介護過程」が 150 時間必修となる。介護過程の授業への応用を試みるにあたっての基礎資料とし、新しい方向性を見出したいと考えた。

２．　実際の授業展開

（１）教室談話について

授業展開を表すため、表を用いた。授業の流れを「導入」、「ウォーミングアップ」、「主活動」の３つに分け、計画の内容を流れに沿って記述した。その計画を基にして実際に授業を行ったときに、その場面で発生した「談話」を右に記述した。「授業研究と談話分析」(秋田 2006)によれば『言語学では「談話」(discourse)とは、ある状態で「実際に使われる言語表現」であり、「何らかのまとまりのある意味を伝える言語行動の断片である」（メイナード　1997）とされる。言語学では談話には話しことばだけでなく、書きことばも含ま

れる。教育研究で「談話」ということばを用いる際には、発話という音声言語であることを前提とし、「今―ここ」における現実の社会的相互作用、あるいは、相互作用で使用される文脈化されたことばを指す場合が多い(川嶋　1994)。また「談話」という用語によって、活動において実際に人々が使用していることばや、ことばが生成される状況や文脈、集団のあり方までを対象にするという研究上のスタンスを示す』(秋田　1998)。従って、『教室談話とは「『教室』という教育実践の場において現実に使用されている文脈化された話ことばによる相互作用」であると定義できる』(秋田　2006)。この授業の談話分析をしてみることによって学生のケアプランの理解のレベルと、どのように理解していくかの過程を知ることが出来、さらにどういう教材をどのような方法で提示すればよいかを知ることができるのではないかと考えた。

上記の内容を踏まえつつ、談話分析の手法を使って、この「ケアプラン作成」の授業を分析した。

（２）授業計画と談話

社会福祉援助技術演習授業の 15 回のうち 3 回が施設のケアプランに当てられた。
学生に積極的に授業に参加させるため、グループワークの形式を取った。更に参加するモティベーションを上げるために教室談話が盛んになるようインシデントプロセス方式を取り入れた。

①　授業で用いた方法

１）インシデントプロセス方式

インシデントプロセス方式とはマサチューセッツ工科大学のポール・ビゴーズ教授によって考案された事例研究法のひとつで、問題の発端となる小さな出来事のみが提示され、情報を収集しながら問題解決していくプロセスに重点が置かれる。

２）グループワーク、ロールプレイ

３）パワーポイント

②　全体の授業のねらい

事例から情報を収集し、適切にアセスメントを行い、ケアプランを作成する。

達成目標

１）ケアプランを理解できる

２）ケアプランを作成できる

（３）授業展開

①　１時限目

１）目標　事例から情報を得る。

	内　容　と　留　意　点	談　　話
導入	①授業の概要を説明 施設介護サービス計画を作成する。 手順の説明。 事例の紹介→情報収集→アセスメント→施設介護サービス計画(ケアプラン)の作成→個別介護過程の展開を理解する	（騒いでいる） （沈黙する）

ウオ―ミングアップ	①ほとんど初対面の学生に積極的に授業に参加させるため、グループワークの形式を取る。 ②グループ名を単なるグループ名ではなく、施設の名前として考えさせる。一つのグループを独立した一つの施設と設定し、仮想施設ではあるが、現実感を持たせる。 1グループ　原則5名で4、6名でも可。 ③施設長、ケアマネージャー、介護福祉士など任意に役割を割り当てる。	教員「1グループ5名のグループに分かれて下さい。4か6名でもいいです。」 「各グループを一つの特別養護老人ホームと見立てて、グループ名つまり施設名をつけて下さい」 「メンバーをそれぞれ施設長始め、施設にいるケアマネージャーや介護福祉士などの役に割り当てて下さい」 教室騒然 1)私、施設長だから命令に従ってよ。 2)おまえ施設長なんだから仕切れよ。 3)ケアプランなんだから、ケアマネが考えるんだよ。
主活動	①事例からアセスメントのための情報集めをすることを説明する。 ②事例紹介（インシデントプロセス方式） ③以上の情報で中村さんの一週間のケアプランを立てる。 ④グループ(各施設)で必要な情報を5～6個見つける。 ⑤グループ毎順番に3つずつ質問し、教員が答える形で情報を提供する。 ⑥さらに質問が出て、答えていく。 ⑦質問が落ち着いてきたところで初めてアセスメントシートを配布する。 ⑧書き込み方について解説。施設名(グループ名)を書き込む。 ⑨アセスメントシートを作成するためにさらに	教員 「職員が言いました『中村さん、お食事に行きましょうか？』すると、中村さんという利用者が『今はいいです。後で行きます。』と言いました。さて、中村さんの一週間のケアプランを立てて下さい。」 教室中が騒然 4)それだけー？ 5)それだけじゃ出来ない！ 6)もっと情報がなきゃ出来ない。 教員「では必要な情報はなんでしょうか？質問に答える形で情報を提供します。」 7)何歳？ 8)要介護度　何度？ 9)誰が書き取るんだ？ 10)施設長だからお前書くんじゃない？ 11)昼ご飯？夕食？ 12)どんな食事をしてるの？ 13)ちゅうか、名前は？ 14)いつから施設にいるの？ 15)家族は？・・・・・・・・・ 16)趣味は？ 17)性格はどんな人？ 18)これじゃ、まだ情報足んないよ。 教員「ではまた質問を受け付けま

	質問が出て、答えていく。 ⑩アセスメントシートの回収	す。」 19)住所は？ 20)施設名はどこに書くの？

２）授業の結果

この時間内でアセスメントシートを作成する予定であったが、作業の早いグループが書き込みを始めただけで終わった。計画していた進行時間より、談話が活発になるまでの時間と課題に取りかかるまでの時間がかかった。

②　２時限目

１）目標　アセスメントシートを作る。

	内　容　と　留　意　点	談　　話
導入	①前回と同じグループに分かれ、記名だけに終わったアセスメントシートを返却。 ②グループ内の役割を思い出す。	21)そうだ、おまえ施設長じゃん
ウオ―ミングアップ	①パワーポイントを使い、介護過程の流れの中でアセスメントとは何かを解説。 ②中村さんの課題の発見と発見する視点の重要性、記録の読み方を解説。	22)バックの絵がかわいい！ 23)先生が作ったの？
主活動	①各グループ毎に中村さんの課題の発見抽出作業。何がどう問題か。 ②教員が机間巡視しながら、質問に答えたり、アドバイスしていく ②課題に沿ったケアプランを作成していく。 サービス計画書１～３を配布。書き方の解説。 ③教員が机間巡視しながら、質問に答えたり、アドバイスしていく 時間が来たところで、アセスメントシートとサービス計画書を回収する。	24)課題ってなんだ？ 25)別にないんじゃない？ 26)身体動くのに、ずっと臥床してるって変！ 27)廃用症候群になっちゃうよね。 28)これって性格なんじゃない？ 29)こんなに書くの？ 30)イチイチ全部書くの？ 31)何すりゃいいんだよ。 32)ケアマネが考えるんだよ。 33)ウチらの施設のケアマネったらさ…と教員にメンバーの日頃を紹介して来た。

２）授業の結果

概ね計画通りに進んだが、１時限目と同様課題の発見に少々時間がかかった。しかし、学生にもグループワークの中で中村さんの課題を見つけていく流れが捉えられたようであった。

③　３時限目

１）目標　サービスプランの作成と発表、介護過程の実際を理解する。

	内　容　と　留　意　点	談　　話
導入	①アセスメントシートと施設サービス計画書を返却する。	34)また、これだ。 35)続きやるんだよね。
ウオ	①各グループの計画書が発見した課題によって、サービス内容がずいぶん違うことを紹介す	36)えっ！そんなことやるんだ。

―ミングアップ	る。 ②自分たちの特徴を出すようアドバイスする。	37)そっちには負けないよ。 38)ウチはまず声掛けだ。
主活動	①それぞれのグループで刺激を受け、次々に特徴のあるサービスを考え出した。 ②机間巡視しながら、特徴のあるサービスを紹介していく。 その一例：中村さんを連れて図書館に行く。 一日 5 回違う職員が代わる代わる声をかける。 誕生会をやる ③グループ(施設)毎のケアプランの発表 ④実際に中村さんと関わった学生の日誌と感動的な介護過程の展開となった事をパワーポイントで示す。 ⑤中村さんを立体的に様々な視点から捉えることの重要性を解説。見方によって全く別のものに見える絵を利用。 ⑥ベテランの職員だけがよいプランを立てるのではなく、実習生が職員とは異なる視点で捉え、プランを立てた点を強調。 ⑦介護福祉士はケアマネージャーが立てるケアプランを実施するだけはなく、ケアプランの作成に深く関わり、実際に介護過程を展開していくことを解説。 ⑧まとめ ⑨感想と質問用紙の記入	いつもはあまり発言しない学生が一日 5 回の声掛けのシフトを組み、メンバーに命令し、 39)ケアプランおもしれぇー！ 40)お出かけもありなんだ。

２）授業の結果

概ね計画通りであった。教員が机間巡視しながらサービス内容がグループ毎に違っていることを示し、刺激したことにより活発になった。更に各グループのそれぞれのケアプランの特徴が発表されていくことにより、明らかになった。

３．授業展開の考察

（１）実習経験を感情移入

Ａ・Ｂ組によって授業進度や進め方が多少変わってしまったが、概ね計画通りに実施された。始めの授業概要の説明時に騒いでいたのが静かになったのは感想からもわかるとおり、ケアプランは難しいと感じたと考えられる。グループを仮想設定の施設にし、職員としての役割をつけることによって、談話 1)～3)、10)、21)、32)、33)に見られるようにメンバーに役柄を演じさせるようになった。これはこちらが意図していなかったが、学生談話の展開の中から自然とロールプレイになったといえる。役柄に感情移入し、どんどん展開していったのは第Ｉ段階実習での 2 週間の経験が大きい。実習目標である「施設職員の役割を理解」が達成できていたといえる。「誰に向けて発話されるか、誰

の発話を受けるかに、意志の受容や文脈の共有の有無が示されるとともに、関係性や役割分化が現れる」(秋田　2006)とあるように、教員の投げかけた言葉によってグループ員の新しい関係性と役割が現れたといえる。また、談話 36)～38)のようにグループ毎のアイデンティティが生まれ、その役を演じながら、普段見られないような積極的な取り組みが見られた。これは「手続きの言語化なしに学習を組織することが可能となっていく」「教室談話は教室内において社会的に適切に振舞うための型として、個人の行為を規制するとともに、参加者が自らの行為の適切性を判断するための手がかりとしても参照される」(秋田　2006)にあるが、施設の職員の行為として演じた根拠といえよう。

（２）事例の持つ教育力

さらにケアプラン作成に使った事例が実習生ならではの視点に立った特徴のあるものだったので、第Ⅱ段階実習目前の学生にとって、身近で自分でも出来ると感じ、取り組んでいたようだ。ここで「事例の持つ教育力」を感じる。

（３）インシデントプロセス効果

ケアプラン作成の元となる事例の紹介を施設職員と中村さんの会話の2文だけのインシデントプロセス方式で始めた。嫌が応にも更なる情報が必要な状態となり、このことで教室が騒然となり、短いセンテンスのインシデントについて、ケアプランの作成は出来ないと談話 4)5)を受けて、クラス全員の関心が集まり、6)もっと情報がなきゃ出来ないと導き出されている。中村さんに対する興味が喚起された。そして、自分たちには何の情報が必要か、自ら考えていく糸口となった。

情報を質問に答える形で提示したことで教室内の談話が盛んになった。談話 24)、25)のように学生にとっては難しい課題抽出も談話 26)～28)のように談話の中から解決していった。これは「談話や知識を共有し、意味を交流しあい、談話を通して教室は考えの種をまき、交流し取り組む場」（秋田 2006）となったと考えられる。談話の単位がグループにも存在し、グループ内でも同様の状況となった。ここから、グループ毎の多様な捉え方の課題とそのケアプランへと発展した。

（４）両義的発話の存在

また、21)そうだ、おまえ施設長じゃん。では会話としてはインフォーマルな友達同士の会話であるが、施設長として授業に臨むきっかけとなっている。これは課題解釈の文脈に沿っている点でフォーマルな会話、つまり両義的な会話になっている。両義的とは『授業に見られる発話の型として、「フォーマル」「インフォーマル」のほかにどちらともとれる「両義的」」な発話』（秋田　2006）のことである。『子どもの両義的発話は、論理性の弱さや不完全さゆえ教師や他児からの発話を誘発し、教室談話を豊かにする可能性がある反面、共有されずに受け流されてしまう可能性もある』(秋田　2006)。特に学生の日常生活の経験や理解にあわせてケアプランの作成を理解させていくとき両義的ことばを聞き漏らさないことが大切である。

（５）スライド、Power Point の活用

学生の感想に表れたようにグループワークにした上にスライド、Power Point を使用したことにより、学生の興味を更に引き寄せることに成功した。談話 39)のように学生が授業にのめり込むように参加した様子から、いかに学生を惹きつけ、介護過程が展開

されていくことの感動と利用者と関わることの喜び、楽しさを授業の中で実感させていくことが重要であることを感じた。

4．　学生の感想から

3回の授業の最後に学生の感想を書いてもらったものを以下にまとめてみた。

（1）　アセスメントやサービス計画は難しいと感じている学生が多かったが、今回の授業では「楽しかった」「積極的に授業に取り組めた」「とてもよい授業」と評価が良好であった。

難しいと感じる内容だったが、①少ない情報から推測させる(インシデント)②施設職員の役割を演じながら、多くの人の意見から、自分の見えない利用者のニーズを発見していくことの楽しさ(グループワーク)③複数グループのサービス計画がいろいろ違っていて、一つの考えにとらわれず、豊かな発想で取り組むことが出来、意識改革された。(自分の枠を飛び越えるスリル)④「一人の利用者のアセスメントを作成するにはたくさんの情報が必要」「その人を色眼鏡で見ていては本質はつかめない」「いろいろな情報を聞くことの大切さを学ぶことが出来た」を実感した。(体験)。などの要素・授業構成の工夫が難しいと感じる内容に「楽しかった」「積極的に授業に取り組めた」「とてもよい授業」という言葉が添えられたということであろう。

（2）　また、取り上げた事例の内容に関して、「中村さんへの実習生の関わりには驚きました。共感すること、本人の生き甲斐を持つこと、記録チームワークの大切差をそこから学ぶことが出来ました」「ケアプランをたてるためには、その方の情報を知ることが大切なのだとわかった。施設の職員は毎日に慣れてしまうことが怖いと思った。いつまでも新鮮な気持ちを持つことが大切だと思った」「介護計画を作成する中でたくさんの情報が必要だと言うことを改めて感じました。一人の人間の人生の背景や現在の心身の状況を理解することの難しさも実感しました」というコメントが書かれていた。この授業を通して良い事例を用いる必要を感じた。

この事例は実習での介護過程実践記録であり、実際「事例の持つ教育力」の大きさを痛感する。

（3）　授業方法については「グループワーク」を用いたことは積極的に授業の望む姿勢に表れた。また、「スライドを使ったやり方がとてもわかりやすかった」「Power Point を用いた講義もわかりやすく、面白かった」とスライドや Power Point の使用も一部試みたことが新鮮だった(飽きさせない)と思われる。

（4）　授業と実習の関連について寄せた感想も多かった。「実習に役立ちそうな授業でした」しかし「実際、自分が実習で行うときは一人でしなければならないので、とても不安ですし、その人の自立を目指したサービスを考えることは難しいと思います」あるいは「実習がすごく不安だったけれど今回の授業で少しイメージを持つことが出来た。難しい文字だけの授業より、達成感がある授業になったと思います」という感想があった。

（5）　マイナス評価

マイナス評価は少なかった。概ねは「難しいが楽しかった」「あまり慣れていなかったので難しかったです。ですが、良い経験になりました」等、マイナス面だけでなく、授

業の良い面の評価が添えられていた。それでも数件、マイナス評価だけ記されているものがあった。「すべてが早く流れてしまい、理解できなかった。口で中村さんの情報を言われても、聞き逃してしまうので、展開できない。表を完成させなければいけないと真剣にやろうと思っても今のやり方では書けない」「話し合いにあまり参加していなかった」「アセスメントの作り方は難しいと思った」「アセスメントやサービスの作り方はむずかしい」それらの評価を今後の改善点にしていきたい。

（６） 最後に「授業についての質問」欄に記載されていたことについて触れる。

①実習生が実際に取り組んだ内容をプリントしてもらえないですか？また、中村さんの情報もプリントしてもらえたら欲しいです。②介護過程を展開する上でもっとも重要なのは利用者さんとのコミュニケーションであると思うが、何より難しく、心を開くのにはどのようにすればよいのでしょうか？③あんだけ話さないし、結構強がりな中村さんが実習生さんに対して本当にあそこまで話したのか？その後の介護員の対応は？④中村さんの情報をまとめたもの、すべての表のコピー(書き込んでないもの)がほしい。

①、④に関しては翌週プリントしたものを配布したが、この点に関しては今後の改善点につなげたい。②については「コミュニケーション技術」にて、演習を伴って傾聴技法を習得して欲しい。③については「本当にあそこまで話をした」というのが答えである。「その後の介護員の対応は？」という質問については「その後、中村さんの世界観を共有する見守り、少しの話し合いの時間を作ることが介護計画に盛り込まれた」ということを答えとしたい。

５． 課題と新カリキュラムに向けて

来年度から始まる介護福祉士養成の新カリキュラムでは介護過程が重視され、科目として「介護過程Ⅰ」から「介護過程Ⅳ」まで１年後期より２年後期にかけて全部で 75（150 時間）回の授業が組まれる予定である。介護過程Ⅰでは介護過程の意義、目的、内容、展開方法を学び、Ⅱで様々な事例における介護過程の展開を行い、利用者に適した介護を考える。Ⅲでは他職種の役割を踏まえ、介護場面でのチームアプローチを学ぶ。更に介護過程Ⅳでは実習での事例を振り返り、介護過程展開の意義、方法の理解を深めるために、実習で受け持った利用者の事例報告書作成および発表にまで発展させていく。

こうした取り組みには介護過程の中の要素（事実の情報化、アセスメント、課題の抽出、介護計画の立案、実践、評価）(2007　金井)をいかに学生が深く理解し、実際に展開できるかが大きな課題である。それにはまず、今回の授業からより教育力のある事例を吟味し、検討する必要がある。次に、教員が事例提示の仕方を工夫し、授業方法のバラエティを増やしていく。学生はこちらが想像していたよりも、学生自身の生活レベルでケアプランを理解していくことがわかった。今回の場合、感想の中にあった「あまり話し合いに参加していなかった」というもの、何よりも 2 年養成課程の 1 年半と言う長い期間に渡って授業を配置させていくため、18 歳から 20 歳前後で人生の内、もっとも多感な時期を過ごしている学生の成長、発達、生活経験、実習経験、友人関係を考慮し、学生を充分に理解して組み立てることが重要と考える。「話が早く流れてしまう」と感じる学生に対してのアプローチ、あるいは方法を課題として検討していきたい。

引用・参考文献

1）秋田喜代美　(2006)『授業研究と談話分析』放送大学教育振興会

2）古川繁子(2004)『新版事例で学ぶ社会福祉援助技術』学文社

3）古川繁子　井上深幸(2007)『シリーズ事例で学ぶ３社会福祉援助技術Ⅱ高齢者編』学文社

4）介護福祉士養成講座編集委員会編集(2007)『新版介護福祉士養成講座１１第３版介護概論』中央法規出版

5）川廷宗之(2008)『介護教育方法論』弘文堂

6）諏訪さゆり(2008)『ICFの視点に基づく施設・居宅ケアプラン事例展開集』日総研出版

7）生涯職業能力開発促進センター

ホームページ　http://nokai.ab-garden.ehdo.go.jp/giho/30F.shtml　2009/1/20閲覧

資料：1

★個別介護過程の展開事例★　「離床を促し生活にはりを持たせるための援助」

1．　利用者の背景

（1）対象者：中村　正　さん（仮名）

７９歳　　男性　　1929（昭和 4）年　5 月 20 日生まれ

（2）既往歴；腸チフス、腸閉塞、前立腺肥大、心臓病

（3）入所の経過（生活歴）

中村氏３２歳で結婚、５４歳で離別。子ども一人、現在住所不明。面会なし。

Ｈ市の救護施設に入所。その後も病院に入退院を繰り返す。

知人頼るが、相手にされず宿屋で宿泊。

生活困難、住居がないため、養護老人ホームに入所。その後、特別養護老人ホームに入所。

（4）現在の状態

①Ａ．Ｄ．Ｌ．（日常生活動作）　食事・・・自立、粥・刻み食（入れ歯）

移動・・・車椅子使用自立　　保清・・・週一回（女性の後には入浴しない）

排泄・・・排尿のみポータブルトイレ使用　整容・・・自立

②障害の程度

歩行障害あり。歩行器から車椅子に変わって 2 週間（本人より希望）

③生活の様子

職員の声かけ以外にはほとんど会話することなく、ラジオ、新聞を読んで過ごす。

時々、売店で買い物をすることがある

④生活習慣

起床 5 時、自分で用意してあるコーヒーを飲む。朝食後は居室にて過ごす。

お茶の時間（10 時）は拒否。

昼食、朝食ともに自分で決めた時間に移動

一日の大半を臥床して過ごす。

⑤健康に関する考え方

自分なりに健康に関する考えを持ち、他人の意見は受け入れない。

多少医学の知識あり。

⑥家族とのつながり

家族に住所を知らせていない。面会なし。

⑦精神・心理状態

自尊心が強く、機能低下を受容できず、戸惑いが伺える。

不安な状態ではあるが人に甘えられない。

（5）性格――ケース記録より――

パーソナリティ診断によると憤慨型

（自信家で独特な考えを持ち、感情がすぐに表に出る。心を許して人と交際しない）

（「新版事例で学ぶ社会福祉援助技術」古川繁子編著　より筆者作成）

資料：２

事例の個別介護過程の実践例

【実践】

- 定期的に訪れコミュニケーションを図る（午前 10 時、夕食の後）→傾聴
- 中村さんがとらえ違いをしていることに気づいてもらい、自己判断の限界を理解してもらう→意見交換
- 臥床による廃用症候群に気づいてもらう→提案

【留意点】

- 自分の価値観を持っている方なので意見を押し付けたり、強制はしない
- 心を開いてくれるには時間がかかることを考慮し、中村さんの気持ちが和むようなかかわりを常に考えて行動する
- 中村さんの意見を需要することから始め、精神の安定を図る

【個別介護過程の展開】

- 施設内のケアマネージャーの立てたケアプランに沿って、介護福祉士として介護過程を展開する

↓

- 多職種協働

【山本ひろみさん（仮名）の記録から】

8/7　「今回は実習生としてお世話になります。よろしくお願いします」

実習は書くこともあってたいへんだろう。こちらこそよろしく。

8/9　入浴後

「さっぱりしましたか？」

「あれじゃ忙しくて落着かない」　つぶやき、機嫌が悪い

8/14　夕食後　ぶどうを車イスに乗せ、つぶれそうなので声をかける

「お持ちしましょうか？」→拒否

8/15 終戦記念日　　居室にて戦争体験の話を聴く

8/16 この施設の歴史を教えてくる前施設長がクリスチャンである話から、お互いにクリスチャンであるとわかる

「教会には何十年と行っていない」「いつかいけるといいですね」

8/17「このままでは寝たきりになってしまう。何とかしなければとおもっている」「リハビリは好きではない。個人指導があればよいが、集団では意味がない、私の身体は訓練だけでは回復しないのだ」と言い切る。「リハビリには個人指導もありますよ。筋力をつけるための訓練は必要なのではありませんか」

8/21 クリスチャンになった経緯を聴く

いろいろな宗教を勉強したが、義理の兄の生き方に共感し、カトリックの洗礼をうけた。22 歳。広島の教会に住み込み、神父見習いとして勉強した。「昔の教義は厳しかったが、忘れられない体験だった」

8/21「売店に行きながら、リハビリをしたい」と申し出。業務の間に時間を作る約束をする

8/23「生きていても仕方がない」「中村さんらしくないです」苦笑い。

雨が降ってきて、傘を貸してくれる

8/24「だるいので、新しい車椅子にかえてほしい」職員に報告して、実施

8/27「なるべく手伝わないでほしい」と一緒に売店に行く。

居室から廊下を車椅子を押して歩行。腰がふらつくので、声をかけ、車椅子に移乗、介助。

「前はこんなんではなかったんだ。かなり衰えているな」と神妙。坂道を一人であがった。かなり疲れた

様子。

買い物を済ませ、庭の藤棚の下で休む。中村さんのお気に入りの場所。飲み物を飲みながら、雑談。

「天気がよく、本当に気持ちがよい時間だった。実習で忙しいのにすまなかったね」と何度もお礼をいっていたが、機能低下を感じている様子だった。

【自己決定と自己受容】

9/19 家族のことを話してくれた。身内への思慕が募っている様子がわかった。

10/2 実習生(私)の付き添いで教会に行きたいと施設長に申し出ていた。

夕方、施設長の許可が出る。実習指導者の援助で実行可能。中村さんに伝えると「そうか、いろいろ考えてくれたんだね」ととても喜ぶ

10/5 教会に行く

事前の準備・・・教会の許可、場所(段差、車椅子が入るか、トイレの位置)、往復の所要時間、タクシーでの移動手段。

9：00　朝の挨拶後、様子を聞く。ネクタイを締め準備を済ませ、臥床。昨夜眠れず、下痢気味。

10：00　実習指導者が送迎のタクシーに連絡、施設長に見送られ、

10：10　玄関を出発

10：20　教会到着　入り口が全開してあり、タクシーで中まで入る。

車椅子の移動は自分ですると頑張る。休みながら教会の附属の幼稚園の様子を眺める。

聖堂の真ん中まで行き、中村さんの横で私も膝間づく。

中村さんは教会の中を食い入るように見つめている。しばらくすると中村さんの目に涙がとめどなく流れていた。涙を拭うこともせず、「ありがとう」といい「戻りましょう」と車椅子を押した

11：00 園に帰着。しばらく話をする。

「排便はないが、昨夜の腹痛がうそのようだ。私みたいなキツイ人間が涙がとまらんかった。敬虔な場所では人間なんてちっぽけなもんだねぇ。本当にありがとう」と何度も繰り返した。

【実習最終日】

- 中村さんに挨拶に行く。「リハビリの先生に一人で出来るリハビリを教えてもらったんですよ。一般浴もリハビリと思って頑張りたいです」
- 「辛くなるから、もう行きなさい。本当にありがとう」と深々と頭を下げてくれた
- 「必ずまた来ますね」と約束をして居室を出た

【個別介護から学んだこと】

- 共感的理解・・・自尊心は強いが、身内もなく、グチも悩みも話せない状況で、自立歩行が難しくなっていく不安
- 生きがいの重要性・・・生きるはりがないので、リハビリに意欲的になれなかった
- 記録の重要性・・・診断テストではわかりえない中村さんの心の動き、人とのかかわり方を知ることが出来た
- チームワークの大切さ・・・利用者を含めたそれぞれの立場の人々。出会いから与えられる勇気

（「新版事例で学ぶ社会福祉援助技術」古川繁子編著　より筆者作成）